様式7　授業改善プロジェクト

アクション・リサーチのまとめ

英語教員指導力向上研修

受講番号　19007　学校名　高知東工業高等学校　氏名　松本　縁

研究の背景

研究対象（学年、クラス等）　3年生　生徒数　9　名

科目名　英語Ⅱ　単位数（授業時数）　4　時間　使用教科書名　VISTA English Series Ⅱ Step One

クラスの様子・特徴

ほとんどの生徒が進学希望で将来的に英語は必要だと感じている。少人数で学力差はあるが「わかるようになりたい」という気持ちは強く、最終学年で語彙や文法の習得をはかろうと授業に前向きに取り組んでいる。

問題の確定

基本的な語いや語順が身につけば英語がわかるようになり、未知の英文も積極的に読もうとする姿勢がでてくるのではないか。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学力データ
授業に対する基本的な姿勢は定着し、私語もなく落ち着いた雰囲気の中で授業を進められる。大学進学を控え、英語がわかるようになりたいという気持ちは強く真面目に取り組むが基本的な語いや語順が定着していないためスピードが遅く受動的な姿勢が目立つ。	ほとんどの生徒が進学希望で、直接進学試験に英語を必要としていないが、進学後のことも考え、和訳ができるように、日常生活で英語が使えるようにと思っている生徒が80%である。また英語が苦手な生徒もいてわかりやすい授業をしてほしいと考えている。	中間考査（85点以上1名　70～84点3名　50～69点5名　平均点67.2）　巻末リスト中学校での既習単語623語中（400語以上2名　301～400語4名　201～300語2名　200語以下1名）

リサーチ・クエスチョン

基本的な語いや語順を身につけ、未知の英文を理解できるようにするにはどうしたらいいか。

仮説・実践・検証

仮説1 ⇒	実践1 ⇒	検証1
中学校・英Ⅰで学習した単語を復習することで基本的語いの定着が図れるのではないか。	教科書巻末リストで中学校と英語Ⅰで既習の単語の意味を確認し、どれだけの単語を知っているかを調べさせた。多い生徒で中学66%、英Ⅰ49%、少ない生徒で中学30%、英Ⅰ25%しか認知できていなかった。そこで家庭学習として単語を暗記する時間を与えた後、30～40個ずつ毎回テストした。1学期に中学単語、9月に英Ⅰの単語テストをしたが、未知の英文を理解するという目的のために意味を覚えさせるだけにした。	中学既習・英語Ⅰの単語を復習する際に知っている単語数を自己申告させた。テストを実施した結果、その数と比べ、中学校単語で最高2.3倍、最低1.3倍、英語Ⅰで最高2.7倍、最低1.2倍増加しており、一定の成果は見られたが、それでも中学単語でリストの66%～97%、英語Ⅰで53%～97%しか認知できなく、テストでは正解していても英文中では意味がとれないこともあり、完全な定着までには至らなかった。
仮説2 ⇒	**実践2 ⇒**	**検証2**
英文を読む際にスラッシュリーディングを行い、意味の「かたまり」ごとの区切りを意識させれば「かたまり」を見抜く力がつき「かたまり」で理解できるようになり、語順の定着も図れるのではないか。	ワークシートを与え「かたまり」だと思うところにスラッシュを入れさせた。その後CDを聞かせスラッシュの位置を確認させ、正誤数を調査した。同じワークシートに新出単語・熟語をマークさせ、意味を書き込ませ「かたまり」に留意しながら読解させた。既習単語の復習・定着も兼ねて英文中の知らない単語もマークさせ、その数も調査した。それが少なければ読解できるはずだが、少なくても正しく読解できていないこともあった。	今までこういう方法で英文を読む経験をしたことのない生徒が多く最初はとまどい、多い生徒で7割も間違っていたが、レッスンが進むにつれ、徐徐に間違いが減っていき、「かたまり」を見抜く力はついてきたようであった。しかし、語い・文法事項が定着していないためか、読解にはなかなかつながらず、仮説3を変更することにした。また音声化できない単語は意味の定着も悪く、フレーズ・リーディングの機会を増やした。
仮説3 ⇒	**実践3 ⇒**	**検証3**
ある程度制限時間を設けて読んだ英文を要約する習慣をつければ文を読むことに慣れスキミングのスキルにもつながるのではないか。	仮説1・2を2レッスンほど行ったが、それだけでは要約やスキミングの向上までつながらないことがわかった．そこで新たに「文法事項を前もって説明しておけば未知の英文も読解できるようになるのではないか」という仮説を立て、教科書の本文に入る前に文法事項を説明し演習させた後、仮説2で使用したワークシートにマークさせ、意味のまとまりで区切り、修飾関係を意識させ、文中での役割を確認させていった。	フレーズの意味と統語構造がつながらない生徒が多く、ワークシートに仮説2でマークさせた単語・熟語・構文に加え、文中での役割を意識させるために、役割に応じて語句をマークさせ、やっと内容理解ができるようになってきた。生徒にとって和訳は必要不可欠なもので、自らの英文解釈が正しいかどうかを検証するために和訳をさせたが、一文の理解はできても全体の意味が理解できていないことがあった。

研究の成果

既習単語の確認で自らの語いの少なさに改めて驚き、大学進学を控え、これではいけないと意欲をかきたたせ、復習単語テストではすぐに結果が見えることもあって好評で、実際に全ての生徒が語いを増やせられたこと。最後のアンケートで「英文を積極的に読もうとするようになった」「文法問題を考える姿勢も積極的になった」「力がついたと思う」と答えている生徒が多く、フレーズ・リーディングで「かたまり」を見抜く力をつけられたこと。自らの知っている単語・熟語・文法事項を総動員し、英文を読もうとする態度を育てられたこと。

今後の授業改善の課題

語い数の底上げは一定できたが、それを英文中で使えないこともあり、語いの認知の自動化を促進し、語い力を高めていくための十分な練習量を確保してやらなければならない。また基本的な文法事項にも不安を抱えている生徒も多く、文法指導への対策も不可欠である。そしてある程度の速さで英文を読めるようにするためにﾌﾚｰｽﾞ・リーディングも続け、英語そのものへの接触量をふやし、これらの課題に取り組んでいきたい。

リサーチについての問合せ先：　職場電話　088-863-2188　電子メール　#REF!